《論　文》

「オリジナリティー」をどう求めるか
―「論述・作文」から卒業論文まで―

奥　田　統　己

目　次

はじめに
1．オリジナリティーの概念の提示
　1.1.　従来の記述
　1.2.　本稿での作業仮説
2．学部学生にとってのオリジナリティー
　2.1.　従来の記述
　2.2.　専門分野に進まない学生にとってのオリジナリティーの意義
3．レポート・卒業論文とオリジナリティー
　3.1.　段階的なオリジナリティーの要求
　3.2.　先行研究の参照の方法
　3.3.　講義のレポートとオリジナリティー

大学生のレポート・論文に求められる要件はさまざまである。ある場合は単に講義や教科書の内容を理解していることの証明だけが求められる。いっぽう場合によっては，とくに卒業論文に対して，学術論文としての基本的な要件，つまり論拠の信頼性，視野の発展性，オリジナリティーなどが求められることがある。

そうしたさまざまなレポート・論文などの書きかたを訓練することを目的とした科目が1・2年次の学生を主な対象として置かれることがある。木下（1981，p.11）は「米国の大学では一般教育課程でイングリッシュ・コンポジション，またはレトリックが必修」であると述べ，また同じ著者自ら一般教育の「表現法」という科目でレポートの作成方法を指導したと述べている（木下，1990，p.234）。札幌学院大学も上記の目的で1990年から一般教育科目「国語表現法」を開講し，1996年からはその名称を全学共通科目「論述・作文」に改めている。さらに大学生を対象とした「論文の書きかた」についてのテキストも数多く市販されるようになった。なお以下では札幌学院大学での名称に従い，大学生に対するレポート・論文の書きかたの訓練を一括して「論述・作文」と呼ぶことにする。

「論述・作文」の指導にあたって問題になることの一つが，標題に取り上げたオリジナリ

ティーの取り扱いである。本稿では，このオリジナリティーの概念をどのように学部学生に対して提示しまた彼らの論文に対して要求するべきかを検討する。自らオリジナルな研究を行いつつ学部学生の指導にあたっている大学教員にとっては，本稿はオリジナリティーに乏しい，当たり前のことの整理に過ぎないと映るだろう。しかし筆者の見るところでは，これまで国内外で出版されているテキスト類でのオリジナリティーの扱いはバラバラである。このことは実際の卒業論文などの指導や評価にあたっても要求する水準が一貫しておらず学生が困惑している現状を反映しているとも考えられ，本稿のような整理の必要性は存在していると判断する。

具体的にはまず第一に，従来の「論述・作文」テキストのなかでオリジナリティーの概念がどのように取り上げられているかを概観する。ついで，それらの記述を踏まえたうえで，必ずしも専門的研究者を目指していない学部学生にとって，自己の論文・レポートをオリジナリティーの概念に照らして考えることがどのような意義を持つかを論じる。そして，実際の卒業論文および在学中のレポートなどのなかで，オリジナリティーに結びつく要素をどのように学生に求めるかについての，段階的なモデルの設定を試みる。

1．オリジナリティーの概念の提示

1.1.　従来の記述

「論述・作文」テキストは国内でも近年数多く出版されるようになった。しかしそれらの多くはオリジナリティーの概念について触れておらず，触れていてもその記述はあまり具体的ではない。そのなかでオリジナリティーについて比較的具体的に述べているものとしては以下の記述をあげることができる。

船曳（1994，pp.211-212）は論文が「他者に向かっての論として立つ」ためには内容が次のいずれかをふくんでいるかどうかが目安であるとしている。

1　発見―新しい現象や事実の「発見」の報告．例：新しい彗星という事実の発見（中略）
2　発明―ある現象や事実について新しい解釈や説明理論を「発明」することで新たな理解を提示する．例：彗星の誕生と消滅についての新しい理論（中略）
3　総合・関連―新旧の様々な現象や事実，さまざまな解釈や説明理論，それらを関連させ，総合することで新たな理解を提示する．例：恐竜滅亡の事実を彗星と他の星との衝突という現象に関連させて理解する（中略）
4　批判・再解釈―上記の発見，発明，総合・関連についての批判や評価，説明や解析．例：彗星に関する研究動向と展望（後略）

早稲田大学出版部（編）（1984，pp.21-29）は卒業論文またはいわゆるゼミ論についての説明のなかで，「論文」と「レポート」とを対比したうえで「論文のテーマを設定するのに一番大切なことは自己の創意，すなわち誰のものでもない，自分だけが見出した論点をもとにすることである」と述べ，さらに「論点の発見，テーマの設定といっても，それは要するに通説，常識に対する批判点を見出すこと」であるとしたうえで，その具体的な方法として次の４つを示している。

1　通説の誤りを見出す。２通説で欠けているところを見出す。３通説に何かを付加する。

4 新しい解釈をする。

木下（1981，p.21）は「主題の選定」についての説明のなかで次のように述べ（以下引用中の強調はすべて原文による），

ひろい題目のなかで自分で主題をえらべる場合には，できるかぎり，自分自身が直接にことに当たりものに当たって得た情報——なまの情報——，またそれについての自分自身の考えに重点をおくべきである。これらは，たとえ不備であり未熟・浅薄であったとしても，オリジナリティーという無比の強みを持っている。紙の上で得た知識——他人の報告や論文を読んで得た情報——は，筆者自身の深い考察によって新しい生命を与えられないかぎり，いかに巧みにまとめてみたところで所詮は二番煎じであって，読者に「ウン」といわせることはできない。

さらに「論文のオリジナリティー」というセクション（p.199）のなかで次のような規定を行っている。

「新しい研究——または技術，装置——」と書いたときの＜新しい（＝オリジナルな）＞という限定は，＜まだ何人も公表していない＞という意味で，原著論文，予報・速報，レターの第一の要件はその主な内容がこの意味で新しいことである。

ただし木下（1981）が主な対象とした読者は専門家あるいは専門家志望者であると考えられ，これらの記述は必ずしも学部学生の卒業論文などを想定しているということではない。現に同じ著者による「一般社会人・文科系学生のため」のテキスト（1990）には，オリジナリティーに関連する記述はみられない。

このほか，斉藤（1988，pp. 7－9）がROTHによる以下の「研究論文といえない」文章についての記述を紹介するかたちで学術論文について規定している部分が比較的具体的なものだということができる。

海外で公刊されている同種のテキストのなかでも，筆者の見るところ，オリジナリティーについての記述は具体的でないことが多い。そのなかでは，ROTH（1995）による以下のような記述（pp. 3－5）がよく知られている。この記述は，アメリカの大学生または短大生を対象とするとみられる composition courses のテキストのなかのものである。

WHAT A RESEARCH PAPER *IS*

1. The research paper synthesizes your discoveries about a topic and your judgement, interpretation, and evaluation of those discoveries.
2. The research paper is a work that shows your originality.
3. The research paper acknowledges all sources you have used.

. . .

WHAT A RESEARCH PAPER *IS NOT*

1. A summary of an article or a book (or other source material) is NOT a research paper.
2. The ideas of others, repeated uncritically, do NOT make a research paper.
3. A series of quotations, no matter how skillfully put together, does NOT make a research paper.

. . .

5. Copying or accepting another person's work without acknowledging it, ... is NOT

research. . . .

1.2.　本稿での作業仮説

「論述・作文」テキストの大半は，テーマの選びかたや参考文献の探しかたなどについては多くのページを割いて具体的に説明している。それに対してオリジナリティーについての説明が抽象的になったりまったく行われなかったりするのには次のような理由があるだろう。そのまず第一は，以下にみるとおり，卒業論文など学部学生が執筆する論文・レポートとオリジナリティーとの関係を重要視しない立場が少なからず存在することである。また，オリジナリティーについて具体的に指導することが，結局指導者の着想や見解を学生に伝えるつまりオリジナリティーを失わせることにつながるという，背反する性格を持っているからでもある。

そもそもオリジナリティーとは何かを論じることは，科学のありかたそのものと関わる抽象的な議論にならざるをえない。本稿にとってもこの問題は予定している視野を超える。そこでここでは作業仮説として以下の点を確認して先へ進むこととする。

1．すでに本間・奥田（編著，1993，p.143）において述べたとおり，ある研究がオリジナリティーを持つと認められるのは，結論として導かれたこと―発見・発明などであれ，総合・批判・再解釈などであれ―が新しい場合だけではない。結論としてはすでに知られていることであっても，それを新しくかつ有効なデータや手続きによって導いたのであれば，オリジナリティーがあると認められうる。

2．オリジナリティーは研究の質を決定する要素の一つに過ぎない。他の要素としては論理の正当性，論拠の信頼性，視野の発展性などが考えられる。

2．学部学生にとってのオリジナリティー

2.1.　従来の記述

では学部学生にとって，卒業論文を含む自己の論文・レポートをオリジナリティーの概念に照らして考えることはどのような意義を持つのだろうか。

その学生が将来研究者などその分野での専門家を目指している場合には，事情は比較的簡単である。長期的に見てその学生がオリジナルな研究を進めることは当然必要になる。短期的に見れば，卒業後の受け入れ先となる大学院などはそれぞれ受け入れる学生の専門性についての基準を持っており，その基準に照らして当面の自己のオリジナリティーの必要性を認識すればよい。

しかしいうまでもなく，すべての学生がそういった専門的な進路に向かうのではない。そこで，学部学生一般の論文に対してどの程度のオリジナリティーを求めるかについては，「論述・作文」の指導にあたっても一致した見解をえることが難しくなる。

早稲田大学出版部（編）（1984）のオリジナリティーについての上掲の規定は，後続する以下のような記述（pp.23-24）から見ても，学部学生の卒業論文を対象に含めたものだということがで

きる。

> 自分の選んだ対象に関する通説を整理してみることで，この段階で，通説と，自分が漠然と描いていたイメージとの食い違いを発見できたら，それは重要な論点であり，テーマとなるのである。（中略）しかしそういう論点をこの段階で見出していくのは困難である。理想的には大学前期の二年間がこれに当てられるとよい。

また1.1.で引用した船曳（1994）の記述は文科系の大学１年生を対象としたテキストのなかのものであり，阪田・ラーク（1996，p.18）も学部学生を対象として次のように述べている。

> 日本の社会科学での教育制度において，斬新または創造的な考え方をレポートにすることは強く求められるべきである。研究レポートの目的は，新しい事実の証明でなければならない。

いっぽう湯浅・野崎（1994）は「学習が法則や命題の再発見であるのにたいして，研究は新たな法則や命題を発見していくこと，すなわち，より深い認識を創造していくこと」（p.25）だとしたうえで以下のように述べている（p.29）。

> 卒論は大学における学習の総仕上げですから，別に研究論文に到達する必要はありません。平凡と思えるような結論であっても，自分で集めた資料に基づき実証すれば立派な卒論です。

この記述は一見すると卒業論文への要求を低く設定しているようにも読める。しかし「自分で集めた資料に基づき実証すれば」という条件づけは，1.2.で指摘した「新しいデータや手続きによるオリジナリティー」に近いものだということができる。

栩木（1995，p．9）の以下のような記述も，オリジナリティーを直接は要求していないようにも読める。しかし後に論じるように，「自由な発想」や「自己実現」にも，ある程度オリジナリティーに結びつく部分があると考えることができる。

> 人文学研究は法律学・医学・経済学のような実学とは異なります。いわば，虚学ですから，卒論で行った探求に対して，精神の冒険という以外の現実的価値を与えようとするのは邪道です。（中略）**卒論ではとびっきり自由に精神の冒険をすべきなのです。**

これらに対して，むしろ卒業論文の段階ではオリジナリティーを追求する必要がないとする書物もある。たとえば佐藤（1973，p.30）は

> 修士論文や卒業論文の場合はもちろん，独創性や創造性を要求される博士論文の場合においても（中略）いわゆる基本書や標準書を選び，これを精読・熟読して，論文構想のための基盤や骨組みとする必要がある。

と述べ，卒業論文段階では独創性や創造性が必ずしも求められていないことを示唆している。なかには，卒業論文は単なる努力の成果であればよいとする記述も見られる。たとえば太田（1996，p．3）は次のように述べている。

> いうまでもないが，学生諸君は今実習体験の最中であり，学会員のようなプロではない。（中略）論文ゴッコ，学会ゴッコをやっているんだと居直れば，深刻に悩む必要はなくなる。卒業生はみんな，多少の成績の差はあれ，全員が合格しているのだ。あなただって大丈夫。自分の能力に応じてそれなりに，まじめに努力すればそれでよいのだ。

海外の「論述・作文」テキストのなかでも，この点について一致した記述は得られない。

1.1.に引用したROTH（1995）はオリジナリティーについての原則が卒業論文にもあてはまるとする立場だと考えられるが，BARRAS（1978，p.142）はthesisについての説明のなかでとくに修士論文，博士論文に関して次のような規定を示し，独立性や独創性が求められるのは修士論文以上であることを示唆している。なおこの記述は主としてイギリスの学位制度を念頭に置いていると考えられる。

> The thesis for a Master's degree is based upon a training in the problems and methods of scientific investigation: upon *independent* research. The thesis for a Doctorate is based upon independent *original* research: upon an investigation in which the frontiers of knowledge have been explored and extended.

2.2.　専門分野に進まない学生にとってのオリジナリティーの意義

しかし筆者は，そういった専門家を目指していない学生に対しても，オリジナリティーの概念を提示し，卒業論文などをその概念に照らして執筆させることには意義があると考えている。

その理由の第一は，大学教育の目的の一つが「学問」の概念を学生に提示することだとするなら，オリジナリティーはその「学問」の重要な要素の一つだからである。オリジナリティーの概念を早い段階から提示され，大学での講義内容が教員のオリジナルな研究成果を反映したものであることを知ること，そして大学生活の最終段階で自らオリジナリティーを求める作業を体験することは，大学において学んだことの内容や位置づけを考えるうえで有益なことだと考える。

理由の第二は，社会に出てから自分の書いた文章を評価する尺度の一つとして，オリジナリティーの概念が有効だと考えられるからである。他人の文章の受け売りではなく，社会的に価値のある文章を書くことは，研究者やそれに準ずる専門性を持った仕事ではない分野に就職した学生にも当然求められる。そのときに必要になるのは，自分の考えと他人の考えとをどう区別するか，他人の文章を利用するときにはどういった注意が必要か，というような，オリジナリティーの概念の基礎となることがらのはずである。

3．レポート・卒業論文とオリジナリティー

3.1.　段階的なオリジナリティーの要求

しかしながら確かに，実際の卒業論文などの指導のなかですべての学生に同じ水準のオリジナリティーを要求するのは現実的ではない。学部学生に対してオリジナリティーの概念を要求する早稲田大学出版部（編）（1984）も，すでに引用している箇所と同じ章のなかで「例外」として次のようなケースをあげている。

> 指導教授から，これこれの問題をやってみてはどうかというふうに，予め与えられるか，何らかの示唆をうけるということもあろう。そういう論点も，それはその教授が長い学究生活の間からもつことのできたもので，自分にとってそれが創意から出たものではないにしても，そのテーマを追求していく過程で学びとることができるものは貴重である。

卒業論文は「学習の総仕上げ」であるとする湯浅・野崎（1994）も，上に引用した箇所に引き続き次のように述べている。

> だからといって，最初から学習と研究に垣根を設け，目標を低くする必要はありません。（中略）そもそも学習するということには，萌芽的形態であれ研究的要素を含んでいなければならないからです。だから，できるだけ目標を高くして卒論にチャレンジしてください。（p.29）

またエコ（1991，pp.4－5）は，PhDの学位論文を「独創的な研究業績」であるとしたうえで，二十代前半に執筆されることの多いイタリアの卒業論文について

> 正真正銘PhDの論文に匹敵する卒業論文（特別に才能のある学生が作成したもの）もあれば，このレヴェルに到達していない場合もある。大学にしても，是が非でもそういうことを要求しはしない。研究論文ではなくて寄せ集め式論文でも，立派な論文として通ることができるのである。

と述べている。

このように，とくに卒業論文においては，選ばれたテーマ，学生の実力などによって，オリジナリティーをどの程度求めるかについて，柔軟な基準を設定する立場が見られるのである。

本稿では，そうした立場を支持したうえで，オリジナリティーの概念を学生に提示し要求するために，次のようなモデルに沿った段階的な水準の設定を試みる。ただし、1.2.でも確認したとおり，これがそのままある論文の全体的な水準の尺度となるのではないことに注意されたい。

A．その分野・問題に関する先行研究全般に対して独自性のある結論，データまたは方法を持った研究

　A１．先行研究の調査を自ら網羅的に行う場合

　A２．主要な先行研究の調査のみを自ら行い，先行研究全般との関係については指導者から見通しを与えられる場合

B．限定された範囲の先行研究に対してのみ独自性のある研究

　B１．主要な先行研究の調査のみを行う場合

　B２．先行研究の調査をほとんど行わない場合

C．先行研究の整理と言い換えに過ぎないが，その整理して言い換えた表現が「自分の日本語」であるとするもの

A１の水準は，プロの研究者にも求められるもっとも厳しいものである。分野にもよるが，多くの学部学生に対してこの水準を求めるのは難しいだろう。これに対しA２の水準は，社会的価値の高い作業を行っている自覚を与えることができるいっぽう，学生の行う作業としては以下のB１の水準と同じ程度でよい。分野と問題設定のありかたによっては学部学生でも実現可能な水準のはずである。

いうまでもなくB１の水準の場合には，見落とした先行研究のなかに，同様の結論を述べている研究や問題に対する同程度以上の有効性を持ったデータを処理している研究がすでにあるかも

しれない。ここがＡ２とＢ１との異なる点である。しかし分野によっては，ある程度社会的に一般性を持つ問題に向かわせようとすると，学部学生にＡの水準を要求することが難しい場合があろう。その場合には，すでに同様な研究があることを指導者が知っていたとしても，それと同じ結果に独力で到達したことに意義を認めることは可能である。

剽窃ではないことだけを求める場合には，Ｂ２の水準でもよいことになる。あるいは栩木（1995，p．9）のいう「自由に精神の冒険を」することが目的の場合に求められるのも，この水準の「独自性」である。この水準はオリジナリティーの点から見ればＣの水準よりはましなものであろう。しかしこの場合はしばしば，独自性があるというよりも，独りよがりで社会的価値に乏しい論文になってしまいかねない。もちろんＣは，2.2.で述べたような学部学生にとってのオリジナリティーの意義に照らして，あまり望ましくない水準である。

3.2.　先行研究の参照の方法

ここで問題になることの一つが，先行研究を参照するときに，そのままの表現で引用させるべきか，それともを自分の表現に言い換えたうえで典拠だけを示させるか，ということである。

引用の多用はオリジナリティーを失わせるものだという考えかたは広くみられる。たとえば阪田・ラーク（1996，pp.127-129）は引用の方法を「元々の文献中で表現された言葉そのものは使用しない」で典拠だけ示す「アイデア引用」と「ある文章をそっくりそのまま書き写す」「表現引用」とに区別する。そして「アイデア引用」を「最も多く使われる」とするいっぽう，「表現引用」については

> 国の著作権法によって違うが，直接文献からコピーできる量は法律で限られている。基本的に１つの文献からそのまま引用する量は，多くても４～６行程度である。ただし，この場合はその人のアイデアだけではなく，言葉そのものをも借りていることになるので，参照の明記が非常に大切になる。

と厳しい限定を加えている。

卒業論文のテーマとして選ばれることの少なくない，研究史を整理する作業などでは，どうしても先行研究の参照が多くなってしまう。そのとき，上のような立場に立てば，「表現引用」を羅列するのではなくむしろ先行研究の内容を「自分の言葉」に言い換える「アイデア引用」を多用させるような指導が行われることになる。

しかし，日本の著作権法第32条が引用に加えている限定は「公正な慣行に合致する」ことと「引用の目的上正当な範囲内で行われる」ことだけである。そして中村（1988，p.128）のように，以下の条件が満たされれば引用の自由利用は可能だとする見解もある。

1　引用文が自分の叙述の内容に対して必ず従の関係であること
2　社会通念上，引用の必要性が認められること
3　引用しようとする著作物の二分の一を越えないこと

本来問題になるのは引用や言い換えの多少そのものではない。1.1.で引用したROTH（1995）

の表現を借りれば，参考文献をuncriticallyに利用しているか，それともcriticallyに検討しているか，のはずである。

参考文献を言い換える作業は，多かれ少なかれ，その文献の著者の思考と自分の思考との境界を不分明にする。つまり「アイデア引用」の多用はかえって十分な批判を経ずに参考文献を利用する結果を招きやすいと考える。表現が「自分の言葉」であること自体には，3.1.で提示したモデルに基づけば，もっとも低い評価しか認められない。そしていかに「表現引用」が少なかろうと，その文献に依拠していることを断っていようと，参考文献の言い換えと整理が全体の大半を占め，末尾に包括的な自分の意見を付け足してあるような卒業論文では，オリジナリティーあるいはそれに結びつく要素を要求する意義は乏しい。

これに対し，参考文献の表現をそのまま引用してそのことを明示することは，論文のなかでの「自分発」の部分をも明確に示すことになる。その結果「自分発」の部分があまりに少なくなるとしても，それは言い換えの技術によってではなく，先行研究のさらなる批判的検討によって，回避するよう指導すべきである。論文の目的に照らして先行研究を多く参照することがやむを得ない場合には，「表現引用」の多用を恐れさせる必要はない。

3.3. 講義のレポートとオリジナリティー

3.1.で示した段階的なオリジナリティーのモデルは，1年次の学生を主な対象とした「論述・作文」などの実習科目，あるいは3年次までの課題レポートのなかでも，学生に提示することが可能である。ただしその場合にはあまり細かい区別を示しても学生が現実に即して理解することが難しいかも知れない。おそらくA．B．C．の大きな三段階程度を提示すればよいであろう。

もちろん平常の講義のレポートでAの水準を要求するのは現実的でない。しかし，与えられた視野のなかでの主要な先行研究として数冊―あるいは一冊であっても―の文献を示し，それらに対する批判を試みさせることはできる。B2の水準に相当するそうした要求は，学問的なオリジナリティーへのステップだとして説明することができると考える。

また実際には，参考文献の内容を理解していることのチェックの意味からか，Cの水準に相当するようなレポートが課されることもあるようである。しかし，そうした課題は結果として表面的なパラフレーズの技術ばかりを訓練するおそれがある。筆者が卒業論文を指導したなかにも，これまでのレポートはすべて参考文献の表現だけを自分の言葉に言い換えることで切り抜けてきたので，自分の考えを文章化するのが難しかったと証言する学生がいる。文献の理解を確認する場合でも，課題文献からの引用が多くなることを恐れるのではなく，むしろその引用部分を批判的に検討するかたちで自分の考えを出すことを求めるべきである。

参考文献

エコ，ウンベルト（著）谷口勇（訳）（1991）：『論文作法―調査・研究・執筆の技術と手順―』而立書房。
太田恵造（1996）：『卒業論文作成の手引き』（アグネ叢書11），アグネ技術センター。

木下是雄（1981）：『理科系の作文技術』，中公新書。
――――（1990）：『レポートの組み立て方』（ちくまライブラリー36），筑摩書房。
慶應義塾大学通信教育部（編）（1995）：『卒業論文の手引［新版］』，慶応通信。
斉藤孝（1988）：『増補　学術論文の技法』，日本エディタースクール出版部。
阪田せい子・ロイ・ラーク（1996）：『だれも教えなかった論文・レポートの書き方―正しい論文の書き方―』，黎明出版。
佐藤孝一（1973）：『博士・修士・卒業論文の書き方』，同文館。
栩木伸明（1995）：『卒論を書こう　テーマ探しからスタイルまで』，三修社。
中村健一（1988）：『論文執筆ルールブック』，日本エディタースクール出版部。
船曳健夫（1994）：「表現するに足る議論とは何か」，小林康夫・船曳健夫（編）『知の技法　東京大学教養学部「基礎演習」テキスト』pp.211-212，東京大学出版会。
本間徹夫・奥田統己（編著）（1993）：『国語表現法　講義要綱　文章作成と日本語の基礎』，札幌学院大学人文学部国語表現研究会。
湯浅良雄・野崎敏郎（1994）：『卒論のためのワープロ・パソコン』，全国大学生活協同組合連合会。早稲田大学出版部（編）（1984）：『卒論・ゼミ論の書き方』新装版，早稲田大学出版部。
BARRAS, Robert（1978）：*Scientists Must Write: a Guide to Better Writing for Scientists, Engineers and Students*, Chapman & Hall, London.
ROTH, Audrey J.（1995）：*The Research Paper: Process, Form, and Content, 7th ed., Wadsworth.*

（おくだ　おさみ　本学人文学部講師　言語学・アイヌ語アイヌ文学専攻）